

2016年6月1日  
報告者 木本明恵

## 南阿蘇タクティール®ケアボランティア

ADRA Japan 熊本地震被災者支援事業参加の報告をします。

### 1. 日程

2016年5月20日~23日（4日間）

### 2. 場所

株式会社南阿蘇ケアサービスが運営する5か所の施設で利用者及び職員へタクティールケアを行いました。

### 3. 内容

5月20日 現地到着後、株式会社南阿蘇ケアサービスの副施設長より被災の状況及び施設内状況の説明を受ける。その後、タクティールケアの説明と施設の希望を聞く。

施設長、副施設長をはじめ、職員数名にタクティールケアをさせていただき、タクティールケアについて理解してもらう。そのうち、3日間のスケジュールを決める。

5月21日 グループホームみなみ阿蘇とデイサービスみなみ阿蘇の2施設で実施。

5月22日 サービス付き高齢者向け住宅結の家と住宅型有料老人ホームはなみずきの2施設で実施。

5月23日 住宅型有料老人ホームはなしのぶの1施設で実施後、午後に東京へ戻る。

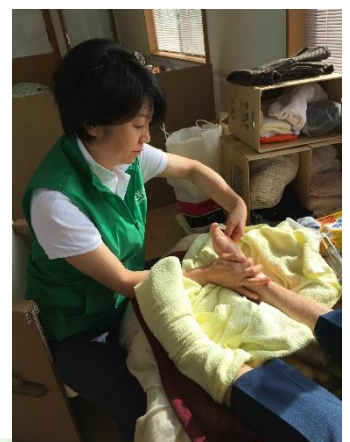
#### (1)利用者の感想

ア 一日中、施設内外を歩き、十分な睡眠が取れていない状況であったが、背中のタクティールケアをするとウトウトする。時折開眼し私を確認し目を閉じる。それを数回繰り返しながら眠る。「一緒に寝よう」と言って私の身体を引き寄せる。30分程ともに寝る。

イ はじめての人が気になるのか、じっと私を見ている。手のタクティールケアをさせていただくとしばらくすると私の手を触れはじめる。心地よかった。「気持ちいい」というとニコリと笑顔を返してくれた。

ウ 「そんなことしなくていいよ」と何回か言うが手のタクティールケアを受ける。しばらくすると昔話を始め、田畑や家畜のことなど色々と話してくれた。

エ 避難所や病院での対応が難しい女性。職員がつきっきりで対応。足のタクティールケアを受けている間は「気持ちいいね」と笑顔で



20分を過ごす。その後はまた、職員がつきっきりで対応。

オ リウマチの女性は自身の病気だけではなく、自宅が全壊、息子夫婦の失業などを抱え、高齢の夫と避難。背中タクティールケアののち、「心と体の悪いものが抜けていくようだ」という。

カ 両足に著しい浮腫。タクティールケアでは改善はできない。期待が大きい分、不安もあったが終わると「飛んで回りたい。動かしても痛くない。いつもして欲しい。」という。

キ 「あなたの手がよかね」と言いながら、私の手にしばらく触れている。

ク 「気持ちいい」、「ほっとした」などとタクティールケアを受けた後の感想をいう利用者が多かった。

#### (2)職員の感想（利用者を優先し、数名のみに実施）

ア タクティールケアを始めると眠る。最後に「力を抜けと言われても、なかなか力が抜けなかった」という。

イ この一か月、泣いたり、笑ったり、でも前に進まない」という。

ウ 多くの職員が「不思議」な感覚を得た様子。しかし、その不思議は不快なものではないという。



#### 4. 感想及び提案

地震発生から一か月を過ぎて被災地へ入った。この時期にタクティールケアのボランティアができたことはよかった。衣食住の供給は進んでいた。しかし、平常心に見えるがこれからの暮らしの目途が立たない高齢者が多く避難していた。もう家に戻れない。このような状況の中で10分、20分、心穏やかに過ごす時間を持っていたら幸いである。

以上